

レポートとは単なる感想文ではありません。講義で学んだことに基づき、課題に即して熟考した自らの意見を根拠・考察とともに明確に読み手（指導）へ伝えるものです。そして、内容に正解・不正解はありません。あるのは導き出した結論(意見)に対し、根拠・考察が充分であるかどうかという点です。指導が知りたいのは皆さんが「課題をどのように捉え、調べ、考え、自身の意見を深めることができたか」という点です。執筆にあたっては「なぜ自分はこの考えに至ったのか」という「なぜ」を大切にするとよいでしょう。

そのためには、まず記述の体裁を整えなくてはなりません。例えば、引用を行う際に引用元の書誌情報が明記されていない場合を考えてみましょう。この場合、自説か否かの判断を読み手ができないため、レポートの評価をすることができません。さらに、意図的でなくとも他人の著作物をあたかも自説のように表記することは「剽窃行為」(盗用)とみなされます。このことを避けるためには、引用元を正確に表記することが必要です。

以下は執筆にあたって注意・遵守いただきたい事項についてまとめています。指導から特別な指示のない限り、本注意事項に従ってレポート作成に取り組んでください。特に、昨今は引用表記がおざなりになっているレポートが散見されます。体裁が整っていない場合は不受理となる場合もあるため、必ずご確認ください。

1 用紙

「金沢真宗学院原稿用紙」(縦書きのみ)を使用。

もしくは各自、PCを使用し下記の体裁で作成のこと。

体裁：A4 縦書き・40文字×10行・14ポイント・上部余白(出典等記入欄)

A4 横書き・40文字×10行・14ポイント・下部余白(出典等記入欄)

※余白記入時は適宜ポイントを下げ読みやすくする。

※横書きの可不可については課題提示時に指導からの指示がある。

(1) フォントは「MS明朝」を基本とし、見やすいものを使用する。

英字入力「Century」、「Times New Roman」を推奨する。

(2) 印刷は片面印字(白色コピー用紙)で行うこと。

※「金沢真宗学院原稿用紙」は教務所で販売(300円)。

※ページ設定を施した雛形は金沢別院ホームページからダウンロード可能。「金沢別院」または「おやまねっと」で検索して、「金沢真宗学院」ページ内「学院生の方へ」を参照のこと。

2 製本・提出

所定の表紙(雛形は図書室に設置、ホームページからも印刷可能)を付けホチキスにて2カ所留めを行うこと。枚数が多く留められない場合は和綴じ又は洋綴じで製本。

表紙には、学科名(授業科目)・レポート題名・学年・氏名を記入する。

レポートは専用の封筒(図書室に設置)に入れたうえ、提出ボックスへ提出のこと。

開院日以外に提出する場合は事前に事務局まで連絡のうえ、教務所ポストへ提出する。

3 文体

常体(だ・である)を使用。敬体(です・ます)は用いない。

4 表記・注釈

- (1) 句読点の禁則処理を行うこと。
- (2) 卒業レポート等、分量が多い場合は章立てや目次を作成し見やすくすること。
- (3) 出典の記載について、必要に応じて凡例を示すこと。
- (4) 参考文献の引用部分と自説部分を明確に区別して記述すること。
※出典を明記せず、他人の説をあたかも自説のように記述した場合、「剽窃行為」とみなす。
- (5) 出典、注釈は原則、当該箇所の上部(横書きの場合は下部)余白に記す。
(PCの場合はテキストボックス、脚注機能(横書き時のみ、適宜余白調整)を使用)
ただし、余白に収まらない場合は巻末もしくは章末にまとめた表記も可とする。
- (6) 用紙下部にページ番号を記入すること。

5 引用・出典(書誌情報)

引用はあくまで自説の補強等に使用する。メインはあくまで自らの文章であるため、不必要な引用は避けること。

以下、各引用方法を列挙する。必要に応じて適切に使い分けること。

ただし、どの場合でも引用箇所に引用元の情報を示し、さらに上部(横書きの場合は下部)余白もしくは巻末に書誌情報を示さなければならない点に留意すること。

なお、掲載紙、レポートの記述の仕方によっては【例】のとおり情報を記載することができないケースもあるが、書かれた情報をもとに、読み手が同じ出典を参照できるかどうかを意識し、必要に応じて対応すること。

また、書誌情報の表記方法(「,」「,」での区切り、「p」「頁」でのページ数の記載など)は自由であるが、同一レポート内では統一して表記すること。(英文献混在の場合は除く)

※以下の【例】では様々な表記の仕方があることを示すため敢えて統一していない。

《記載が必要な情報》

【本文中に記載】

著者名(姓のみ)、出版年、ページ番号

【余白、もしくは巻末にまとめて記載】

著者名、出版年、タイトル、その他書誌情報(雑誌名、シリーズ名、巻数等)、出版社。

(1) 直接引用

原文を一言一句違えずに示すこと。句読点、送り仮名等細かい箇所にも注意を払うこと。
通常の引用、ブロック引用の2種類がある。

① 通常の引用

引用箇所が僅かな場合に使用する。引用箇所を一重鍵括弧「」で示す。

【例】

池田(2005:p. 11)は、「真宗学」また「教学」の名称がさす意味について「真宗即「仏の教化」の真宗の学びであり、教学も同じく、教即「仏の教化」の教の学び」とおさえている。このことは、「教化学」の「学」とは何かという今回の課題を考えるうえで非常に重要な視座を与えている。そもそも、～

②ブロック引用

長い文章を引用する場合に使用する。2字下げか、前後1行空けて1字下げにする。途中を略す場合は、「(中略)」「～」「……」のいずれかを用いる。

【例】

親鸞の菩提心に対する立場について、本多は以下のように述べている。

菩薩道を成り立たせている「菩提心」について、親鸞は単に菩提心を否定する立場に立ってはいない。「自力の菩提心」は、凡夫では発起し得ないとしながらも、他力回向の信心が「涅槃の真因」なのであるから、真実信心こそが成仏（菩提の成就）の因たる「菩提心」なのだと見ているのである。（本多 2022、88 頁）

この見解が示すように、講義で学んだ自力と他力の関係について私は～考える。

(2) 間接引用

引用したい箇所が複数ページにまたがっている場合などに内容を要約し使用。ただし、筆者の意図を損なう場合もあるので、不安な場合は(1)直接引用を使用する。

【例】

本多(2022:88)によれば、親鸞は真実信心こそが菩提心であるとの見方をとっている。このことは、講義で学んだ～とも関連し、～と考えられる。

(3) 「真宗聖典」や各教科書の引用について

金沢真宗学院のレポートでは『真宗聖典』や各教科書の引用をするケースが多い。ゆえに、利便性を考慮し『真宗聖典』や金沢真宗学院指定の各教科書の引用元の表記についてのみ書名とページ番号の記載で可とする。凡例への掲載、余白への書誌情報掲載は不要。

【例】

『歎異抄』では「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。」(『聖典』、628)とある。しかし、私自身のことを顧みたとき～。

無上正覚は、大乘の菩薩が「衆生とともに求める菩提」(『大乘の仏道』：p.154)を意味しているが、～。

(4) 出典（書誌情報）記載 引用箇所の余白に適宜、またはまとめて巻末に記載。

【例】※著者順(50音順)で記載

—参考文献一覧—

市野智行 2022 「第一次五カ年計画の検証を通して」『同朋佛教』第58号、同朋大学佛教学会。

池田勇諦 2005 「教学は教化の学」『真宗教学研究』第26号、真宗教学学会。

池田勇諦 2009 『真宗の実践』(同朋選書41)、東本願寺出版。

本多弘之 2022 『正信念仏偈講讃』、東本願寺出版。